

介護老人保健施設しおん

症 例 概 要 利用者氏名：H様 80代後半 要介護5
利用期間：令和元年12月下旬～令和2年8月下旬(ご逝去)。
既往：慢性心房細動 両側肺炎 症候性てんかん 急性上腸門膜動脈閉塞
精巣上体炎 陰囊水腫 甲状腺機能低下症 閉塞性動脈硬化症 総胆管結石
胆嚢全摘 前立腺肥大
現病：脳血管障害後遺症

経過：仙台ひまわり所長より相談(前大崎訪問ST)あり。献身的に娘が介護していたが介護疲れにより家庭崩壊の危機となりしおんへ入所となる。

内 容

H氏は地元の農林高校を卒業後、農協職員として退職まで勤め参事の経験もあり、地元の名士であった。上記診断のため日常生活は全介助、H訪問看護を利用しながら看護師の経験のある長女が在宅にて介護を行っていた。しかし、頻回に不穏状態となる事や喀痰吸引やその他の介護など、自分ひとりが完璧に介護を行わなければならないという責任感によって他者を頼る事が難しくなり介護疲れを起こした。長女の旦那からこれ以上は家庭内で介護を行って行くことは家庭崩壊を招く為、在宅での介護は困難との訴えがH訪問看護にあり紹介にて入所の運びとなった。

入所時は長女がH氏と離れて暮らすことに不安があり、日に何度も施設に電話連絡し事細かにH氏の状況について確認されることが多くあった。当施設に入所したことで介護負担から開放されるどころか常にH氏の事が頭から離れない様子であった。そのためH氏の状態が改善される事はもとより、長女に安心して任せてもらう事が出来るように訴えを傾聴し安楽に生活している事を伝えた。

具体的には紹介元のH訪問看護と連携をとり在宅での過ごし方をアセスメントし、施設においてよりメリットを感じてもらえるよう看護・介護・リハ職が協働しケアにあたっている事を伝え安心を感じられる関わりを行った。H氏は日中傾眠傾向であり、夕方から深夜にかけて大声で叫ぶなど不穏行動がみられていた。声出しに伴い痰のからみあり頻回な喀痰吸引も必要な状況であった。在宅では離床することは無かったとの情報があった為に日中の離床を促した。初めは硬かった表情も関わりの中で次第に穏やかになり頻回であった声出しも改善傾向となった。H氏の状況については長女に随時お伝えし信頼関係の構築にも努めた。

コロナウイルス感染拡大に伴い面会制限の中でも長女からは「しおんにお願いして良かった。安心してお願いできます。これからもよろしくお祈いします。」とのお言葉が頂けるまでになった。

残念ながら、令和2年8月下旬に急性心不全にてご逝去されたが、その際にも長女から「最後の時間をしおんで過ごせた事は、本人はもとより家族の幸せでした。今まで見られなかった笑顔に沢山出会えました。ありがとうございました。」とのお言葉を頂く事ができた。

今回の事例を通して介護施設において利用者さんはもとより、ご家族への対応も大切な業務なのだという事が再確認されたとともに、地域を超えワンチームとなって寄り添った症例としてキラキラ介護賞に推薦致します。